

履 正 社 柔 整

— 日本の医療体質の特徴が見えてきた —

教頭・学科長 田中 雅博

まずは 7 月の静岡県熱海市での豪雨災害土石流で亡くなられ方に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被害を受けられた方に心よりお見舞いを申し上げます。

さて、新型コロナウイルス感染症の影響で、昨年の医療費はここ近年で最低の支出であると報道を目にしました。週刊の RJM でも触れましたが、内科や整形外科でのリハビリを受ける患者は激減し、クリニックの売り上げも最低であると、多方面の院長から聞きました。半面筆者も経験しましたが、近くの大規模ショッピングモールのラウンジで、早朝からテーブルと椅子にお座りの高齢者が多いこと。座る椅子がないと、お店に苦情が多々あるとも聞いています。高齢者がクリニックからショッピングモールへ大移動したようです。つまり、いかに“不要不急の診察、検査、注射、リハビリ”が行われていたか、その結果、医療費の支出が最低になったのでしょうか。

我が国は民間病院が医療の 70%を担っています。欧米の 30%台とは真逆です。民間に任せることは公費負担からすれば、いい面もありますが、感染症の緊急事態となれば、収益率の高い専門領域に偏ってきた我が国の医療は悲鳴を上げるわけです。民間病院は感染症病床を増床したくない、長期の採算性とリスクを考えると積極的にはなれない。そんなところでしょう、代わって公立病院からすると、『民間はいざとなっては役に立たない、医療危機と崩壊を起こしているのは民間だ』という声があれば、民間病院からは『公立病院は、経営感覚なし、赤字垂れ流し、親方日の丸の体質だ』という声が聞こえる。

しかし今後は、あらたな感染症の対策に向けて、日の丸ワクチンの早期の製造と、感染症の病床確保は解決すべき課題でしょう。それともう一つ取り上げておきたいことがあります。それは、医療職種の権限移譲です。

欧米も日本と同じように医療チームで患者の治療に当たりますが、日本では医師しか行えない行為を、看護師や理学療法士、薬剤師、検査技師などが行っている背景があります。つまり、権限や役割を分担し、医師でなくてもできることは、コメディカルの医療チームが行って、医師の負担を減らす。その結果、今回の感染症対策へ従事する人材が増える。我が国とは大きく異なる部分です。

前項で取り上げた、クリニックからショッピングモールへ高齢者が大移動したことが、医療費の削減になるなら、極端な事例ですが、ショッピングモールでできる高齢者の対応を行えばいいのです。当然必要な医療はそうはいきませんが、“不要不急の医療”はなくなり、医療費は激減するでしょう。

医療費削減は、我が国存続の至上命題です。同じようなサービスを行えるなら、患者安全医療安全の下、安価で簡素、安心なサービスを提供すべきかと、今回の行動変容から検討すべきではないでしょうか。

— TOKYO2020 オリンピック体験記 —

教員 青木孝至

こんにちは、柔整科教員の青木です。

新型コロナ感染拡大により、史上初の1年延期となった東京2020オリンピック。今年に入ってもギリギリまで開催すべきか中止すべきか賛否両論がありました。無観客、バブル方式、プレイブック作成（感染対策ルールブック）など、様々なコロナ対策を講じて開催に至りました。日本チームは史上最多58個のメダルを獲得、金メダル数もアメリカ・中国に次いで3位と大活躍を見せてくれました。日々新型コロナの暗いニュースが続く中、選手たちの頑張りのおかげで皆さんの元気をいただいた国民も多かったのではないのでしょうか？



さて、この東京2020オリンピックに、今回ボート競技会場のメディカルスタッフとして参加してきました。いつもは代表チームの帯同トレーナーとして付くことが多いのですが、会場救護として参加は初めてでした。違う視点で新たな発見や経験を積むことができ、充実した時間を過ごすことができましたように思います。

オリンピックのメディカル研修は、実は新型コロナ拡大よりも前（2019年）から始まっていました。「オリンピックでは、あなたたちの救護対応は全世界で映っているから、手際よく2分以内に評価・搬送まで行うように！」と言われ、プレッシャーを感じる中で仲間とともに学びました。その後、新型コロナ感染拡大に伴い、集合研修ができなくなり、オンデマンドによるオンライン研修が中心となりました。その動画数はかなり多く、時間を確保して何度も見直すのに苦労しました。中には、「爆傷（爆発物による損傷）」「銃創（銃弾による創傷）」などテロ発生時の対応動画もあり緊張感が湧き上がりました。



オリンピック開催5日前に会場に集まり最終チェックをし、当日を迎えました。新型コロナ感染対策は徹底されていました。自衛隊員たちも常駐しセキュリティも徹底されていました。一番心配していたのは日本の猛暑による熱中症でした。特に南半球は冬の時期なので選手たちもあまり日焼けしていなくて色が白く特に気になりました。自分たちはゴール付近のポンツーン（選手がボートを降りる浮棧橋）のそばにテントを設置し、いつでも出動できるようにストレッチャーや車いす、アイシング用品など用意し、ドクターとともに待機していました。医務室前にはいざという時のアイスバスや救急車も用意されていました。

実際、暑さの厳しい日はゴール直後、ポンツーン（浮棧橋）でボートから降りれなくなる選手が続出しました。同じ時間帯に海外選手の数名が不調を訴えるケースもあり、人手や医務室のベッドが足りなくなりそうな時もありました。やはりこの時期の日本の暑さは屋外スポーツには大変厳しいと思いました。

数日後、台風が近づき出してから風が吹くようになり、対流による熱放散によって熱中症が減少しました。そのほか、裂傷や腰痛などいろいろな傷病もありましたが、大事に至らず無事に大会が終了しました。

毎日、MEDICAL TEAMの仲間といろいろなケースを想定して話し合い、より良い準備を進めていく作業はとても刺激になり、チームが日々結束していくような実感がありました。

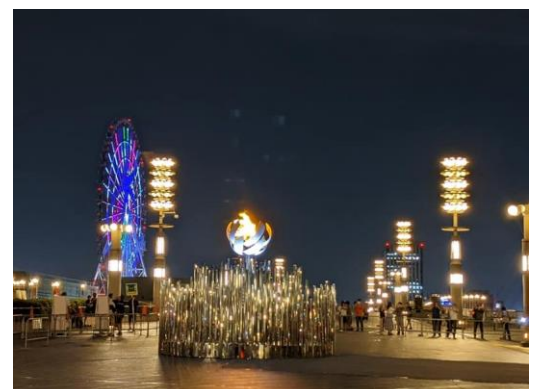


以前（2019年）、暑さ対策の一つとして「会場に朝顔を設置」という案が言われていました。「本当に実施するのだろうか、朝顔を見て涼しいと感じるのは日本人だけじゃないの」と自分は思っていたのですが、実際には会場にたくさんの朝顔を置かれていました。殺風景な会場に緑があり、一つ一つの朝顔には子供たちのメッセージカードがかけられていて、それを見て喜んでる選手もおられたので良かったと思いました。



今回は、外傷等が少なかったのですが、救護スタッフとして外傷のみでなく、様々なことを学び、知っていく必要があることをあらためて感じました。またドクターとの連携をスムーズに進めるうえでも大切かと思えます。

書き切れてないことはまだまだたくさんあるのですが、少しでも柔道整復師を目指す皆さんの参考になればと思います。有難うございました。



< 語録「履正林」 >

1. 実習施設配当面接： 柔道整復師学校規則では、臨床実習を4単位180時間履修しなければならないことになっている。卒業生はご存じだろうが、履正社では、1年に2単位90時間、2年に2単位90時間配当し、認定された実習施設で実習を受けることになっている。しかし、この実習施設の振り分けは、実にテクニックを必要としている。**実習生の将来ビジョン、通学限定か宿舎利用、指導者とのマッチング、成績や実習生のキャラまで勘案**しないと、ミスマッチの環境では様々なリスクをはらむことになる。したがって、すべての実習生と個別にかなり時間をかけ、面接をするのである。おかげで、ゼロとは言えないが、課題噴出問題発生はかなり低い。どこかの学校では、このミスマッチによって実習生が命を絶った事案が発生している。履正社柔整の厚労省登録実習全体責任者のTSU先生は『この面接は一番気を遣いますね、**柔整含めたパラメディカルの学生を、生かすも殺すも、原点は臨床実習の施設配当です**』と、柔整教育を知り尽くした、超ベテランの先生らしきコメントだ。ぜひ今後も指導願いたい。

2. オンライン就活面談： 大学生の就活も今はオンラインでの会社説明会やOBOG訪問がメジャーとなっている。先日、沖縄の開業卒業生と、沖縄移住を希望している3年生をオンラインでつなぎ、OB面談をさせた。感染症の拡大による新たな文化が発生し、その恩恵を受けていると感じた。しかし、このオンラインで与える相互の印象や実感は100%反映したものではないと印象を受けた。やはり、**対面と違って全身が見えない、目線や身振り手振り、身体の動揺、声の強弱、端的な会話など、必要最小限の情報交流として活用**する事がいいだろう。実際先日の面談に同席し、司会進行役の筆者が、本意を伝えるため、相互にフォローする場面が多くあったことも事実だ。普段から学生募集のチャンスでもZoomを見事に活用している、**でかいM先生は『全身が見えたら困ることもありますしね、顔のアップがメインでもいいんじゃないですか』**と、変に納得できる説法を聞いて、反論できなかったのは私だけではない。



3. 社会保険支払基金： 健康保険の診療報酬の請求などに対して、医療機関に支払う公的な機関だ。医師や歯科医師、薬剤師の医療費の請求先でもある。ペーパーではなく、デジタルオンラインで請求することになっている。柔道整復師や鍼灸師などの療養費請求はここには含まれていない。今、この柔整や鍼灸の療養費も社会保険支払基金に一元化する動きがある。**もし、実現すると代理請求は消滅し、特に柔整業界のビックバーン**が起これると予想されている。それはなぜか、柔整にはこの代理請求の手数料で、肥しを得ている組織が存在している。ある学者は、この存在こそが柔整の職業倫理や正義と使命感を無視し、破綻に追い込んでいく悪の元凶だという。本稿冒頭で記述したように、この**手数料負担が結局は、患者負担となって回り回ってくる現状は最適化すべきだし**、反論の余地はないだろう。自ら接骨院を営んでいる社長のF先生やN先生は同感だ。『先には診療報酬と同じシステムになるでしょう、ただ**柔道の精神を継承するためには、会員間の団結で何かしらの柔道セミナーは必要**ですね』、柔整専門職教員として見上げた心意気は、今後も鏡であり続けてほしい。

4. 職域接種制度： 新型コロナウイルス感染症拡大阻止の切り札として、ワクチン接種が推奨されている。1回目の接種はすでに3500万人(7/7時点)と報道がされている。場所、打ち手、ワクチンの3つのファクターが整わないと接種率の向上に寄与できないが、現時点では国からの供給不足が懸念されている。その原因が職域接種率の向上だ。自衛隊や公設の大規模接種会場とあわせて、職場やその家族、同じ職業などのつながりを集団化して一気に接種率を上げようとした政府の試みだが、予想を上回る反響で、ワクチンが不足している状況だ。**この度大阪での大規模接種会場の都合で、9月の教員研修会が11月に延期**したことを教務のY先生は『都会のゴミゴミした所より、閑空を見渡すホテルで開催できる方がいいじゃないですか、海が近いのはいいですね』と、自らの郷土から見える日本海を重ね合わせている感情は、縁結びの神様の郷土愛から発したのだろうか。

5. 宝塚歌劇団： いうまでもなく、**“清く正しく美しく”**の、100年以上**不動の価値を持つ**おそれおおい、ザ・タカラヅカ。団員とは阪急電車でお見かけたことはないが、音楽学校の生徒は阪急宝塚線の車内でみかけたことがある。一度新聞で報道され、それ以降見かけなくなったが、音楽学校の生徒が阪急電車にお礼をして車内に乗り込む風景を見た記憶はある。賛否の意見はあるが、筆者は違和感を覚えない。比較するには、おそれ多いことかもしれないが、**履正社も来年創立100年**が経過する。学内のある会議で『タカラヅカと〇〇でコロナできたらいいですねえ』という声を聞いた。履正社グループの生徒と学生は、ほぼ大半が阪急電車に通学しているが、**阪急創業者、小林一三氏が聞かれたらなんとコメント**されるのか、お気持ちを聞いてみたい。



『海外研修が柔道整復師の品質形成に与える影響』

“井の中の蛙大海を知らず”という言葉がある。ご存じの言葉ではあるが、周りを海に囲まれた島国である我が国民、“和を以て貴しとなす”である。他を排除し、仲間内で楽しく、外部侵入を避ける。そういう筆者も、新婚旅行ではじめて海外へ行き、それ以降、海外の文化風習にはまり、家族を連れまわした。連れまわしたと言っても、環太平洋の国々だけではあるが、振り返ると子供の成長に大きく資することになっていると感じている。

海外諸国に行くと、言葉はもちろんであるが、様々な人種がいて、衣食住の文化や習慣が異なり、はっとすること、おどろくことが多い。他国の文化や習慣、生活を知るとは、これまでの人生や生活を振り返らせ、良くも悪くも、たくさんの生きざまのシーンを気づかせてくれる。

視野を大にし、豊かで寛大な心を育み、人を許す人格形成、倫理観正義感の育成にも寄与するはずだ。成長段階で実施することにより、一層その効果は大きい。選択制であったが、前任校で、今から 20 年ほど前に 2 年連続海外研修に学生を引率した。長い柔道整復教育の歴史で、いま振り返ると大変なことをしでかしたのかもしれない。それ以降、必修科目として履正社柔整で約 17 年間、柔道整復師のタマゴを引率してきた。古来の先達、先輩からすると、これまた、おどろきの柔整教育と育成プログラムだと感心されるかもしれない。

約 20 年間、約 1000 名の学生が経験したわけであるが、教員 30 年の経験からして、確実な根拠の証明とは言えないが、人格形成に役割を果たしているのではないかと、感じるが多々多い。最初の 10 年とあとの 20 年は、国の柔整養成校不指定訴訟、福岡事件の前後にあたり、学生の気質が異なるが、海外研修を経験した教え子が不正事案を発生させたこともなく、一定の倫理観と正義感の育成に大きな影響を与えたと信じている。

履正社柔整は、時代の変革と歴史的役割を終えやむなく必修性から選択制に移行をしたが、来年の海外研修には 80%以上の学生が参加する意向を示している。

20 年間の実績を活用し、今後も高い人格育成と豊かで広い視野を持つ、品質を備えた柔道整復師を育成していきたい。

以下、高山精雄先生のワードからしてもお分かりいただけるだろう。

☆教務室からはみ出し寸言☆

新聞や雑誌で目にとまった記事、誰かとの会話、まち角の看板、ネットの広告などから感動した、共感した、泣けた、じーんときた、などのワードやセンテンスを紹介します。

学校法人杏文学園 東京柔道整復専門学校、元理事長
公益社団法人 全国柔道整復学校協会 第初代会長

高山 精雄（たかやまきよお）先生の名言

『Think Globally Act Locally!』

筆者なりに解釈すると『広い視野で世界を見て、何事もゆっくり落ち着いて行動をするように』、かと。

毎年開催される、全国教員研修会のあいさつで、経済学博士でもある高山先生はいつもこのようにご挨拶をされていた。私は教員になって 30 年余りになるが、30 年前の教員研修会でも聞いた記憶がある。

言葉に感銘を受け、一生忘れないワードだ。

先生は、今年 1 月にご逝去され、今、ご子息の高山雅行理事長と、学校協会と一緒に仕事をさせてもらっている。高山精雄先生、ありがとうございました。